

口頭発表「学年飼育に関する児童の声と鳥への認識調査結果から」

西 勝海



1 はじめに

子どもたちの学力低下問題が問われている。今日の学力問題は、学習状況を点数化しやすい教科学習に視点が行き、学校教育のもう一つの特徴である特別活動などの軽視につながっているのではないだろうか。小学校での動物飼育は一般的には特別活動の委員会活動として実施されているところが多い。

しかし、生活科が始まった当初、動物飼育が生活科の教材として見直された。その後、総合的な学習の時間の取り組みとしての実践例も取り上げられるようになった。本校では、セキセイインコの飼育を3年生の『学年飼育』に位置付けて実施している。ここで私は、セキセイインコの飼育を教材として生かす視点の研究が必要であろうと考える。また、総合的な学習の時間の題材にもなるのではないだろうか。この活動は、子供と教師がセキセイインコの飼育を介在にして、会話のキャッチボールができるからである。

2 「セキセイインコ」の飼育活動から得られた調査

(1) 比較調査

実際に飼育活動に当たっている本校の3年生の子どもたちと、学校内でセキセイインコを身近に見ているが実際には活動していない厚木市立E小学校の児童を対象に、鳥を通しての学習認識について、次のような調査をし比較した。

- ・1年間当番活動をした子どもの感想調査
- ・「鳥類への知見」調査
- ・「鳥に関しての認識・理解」調査

(2) 飼育活動の感想調査

平成18年3月、1年間の飼育当番活動を終えた3年生の子どもたちにアンケート記入方式で調査を実施した。

① 「よかったこと」

「よかったこと」の感想を分類し図1に示した。最も高い数値を示したのは、清掃・ふれあいであった。羽のきれいさに関すること7人に比べても5倍近い数字である。これは見ただけのもより自分の行動から得たことの方が強く印象に残るということであろう。子どもは「インコの世話ができた」ことの直接体験を喜ぶことが伺える。

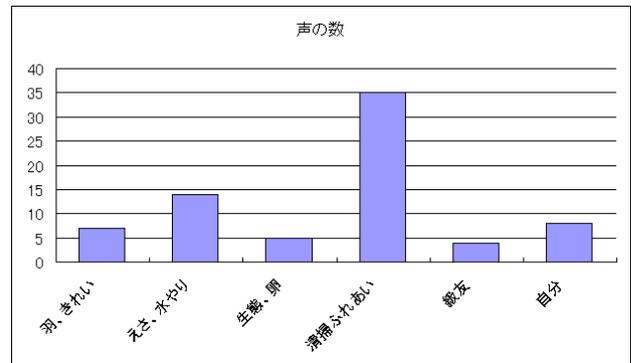


図1

② 「いやだったこと」

次に「いやだったこと」の感想を図2にまとめた。ここでは、ふん・においに関することが最も高くなっている。檻の中で飼育されているセキセイインコと自分たち『人』との関わりを考えさせるよい教育題材といえる。また、よかったことと同様に自分の行動が伴う、清掃・ふれあいが高い数値を示した。「死」に関することに声を寄せた子どもが13人もあった。全体の21%である。セキセイインコが寒さのためか多く死んでしまった。教師にとって「死」は設定した機会ではないけれど、生命尊重教育の好機と捉えることが重要になる。

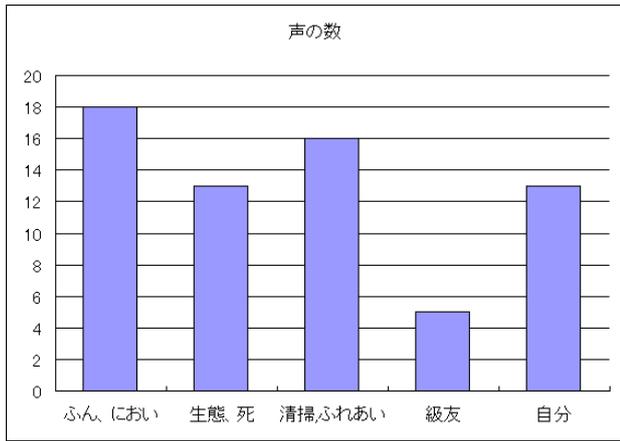


図 2

(3) 鳥類への興味関心調査

飼育活動を体験した子どもと、していない子どもの興味関心および知識理解にはどのような差が生じるか、身近な鳥についての知見及び描画法による認識調査を実施した。

指標とした鳥は次のとおりである。

ズメ	メジロ	カラス	ヒヨドリ
ンチョウ	セキセイインコ	ハト	ウズラ
ヤボ	ニワトリ		

① 知見の調査

この調査から図 3 の結果を得た。『見たことがある鳥』の答え率は明らかに本校の子どもが高かった。実際に飼育活動に関わっているセキセイインコは当然の数字と思われるが、メジロ、ヒヨドリといった野鳥にも関心が向いていることがわかる。このことは学校での飼育活動が、子どもたちの日常の生活に影響を及ぼしているということが伺える。

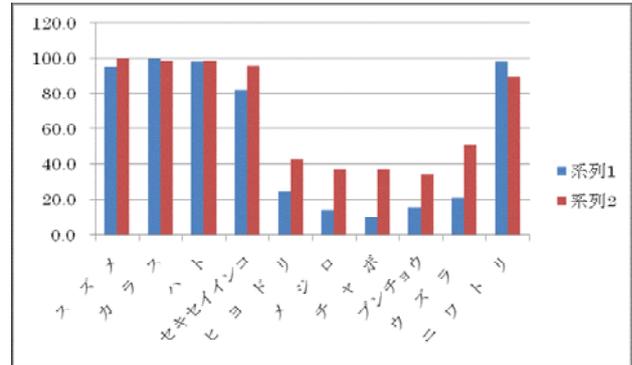


図 3

② 描画法による調査

セキセイインコについて既得の知識で描いてもらうことにした。鳥の体や動きに関する描画表現を部位ごとに表 1 の基準通りに点数化して比較することにした。

表 1

視点の部分	評価基準	点数
目	描いてない	0
	描いているが単なる○や×など	1
	二重丸など目として捉えている	2
くちばし	描いてない	0
	描いているが単なる三角など	1
	曲がりなど特徴を捉えている	2
つばさ	描いてない	0
	描いているが単なるかたち	1
	羽毛や大きさなど特徴を捉えている	2
尾羽	描いてない	0
	描いているが単なるかたち	1
	羽毛や大きさなど特徴を捉えている	2
足	描いてない	0
	描いているが単なるかたち	1
	三つ指やつめなど特徴を捉えている	2
飛翔	描いてない	0
	描いているが単なる広がりなど	1
	ひろがりなど特徴を捉えている	2
飼育の様子	描いてない	0
	描いているが単なる静止	1
	巣箱、えさ入れなど特徴を捉えている	2

描画法による調査の集計結果は図4の通りだった。本校の子どもの方が、高得点のところ分布していることがわかった。9点以上の獲得が全体の10%になっている。一方、E小学校の子どもは、高得点部には全く獲得がなかった。このことから、

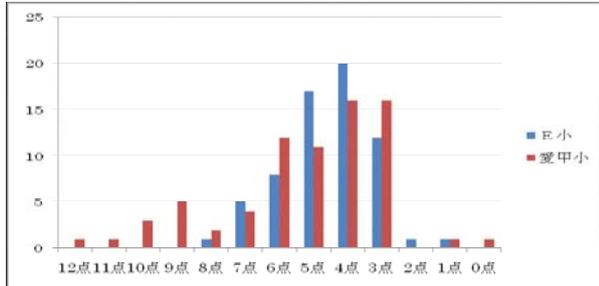


図4

3 本地区（厚木愛甲地区）の飼育活動の実際

小学校の動物飼育状況を神奈川県厚木愛甲地区の調査から見てみると、図5の通りであった。動物を飼育している学校数は、31校中26校であり全体の84%である。その内訳を見ると、特別活動の形をとっている学校が22校、教師が飼育の世話をしている2校、新しい飼育形態である「学年飼育」が2校であった。この学年飼育は、どの子にも動物飼育を体験させることができ、総合的な学習の時間の題材にもできると考える。

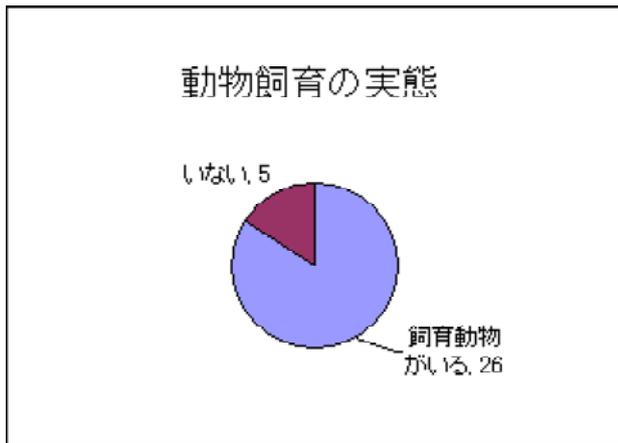


図5

飼育活動をしている子どもは直接の活動によりセキセイインコを具体的に見ていることがわかる。小学生時代における知識獲得は、実際活動による体験の大切なことが推察できる。

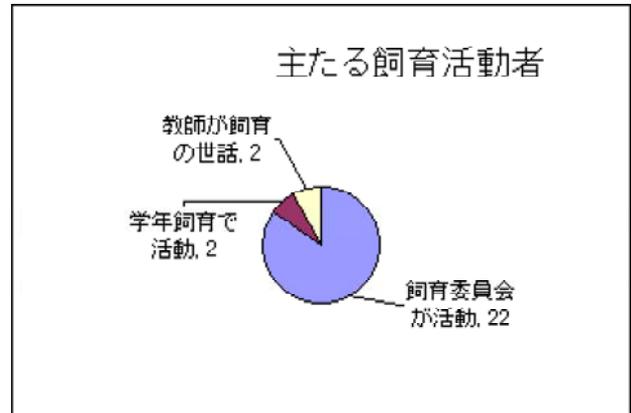


図6

4 まとめ

学校動物飼育は、子どもの飼育体験があってこそその価値は生まれる。学校の教師は常に正確な理解を求め適切な飼育環境をつくらなければならない。小学校の動物飼育は、長く特別活動のひとつと考えられてきた。一部の子どもが、委員会活動として世話することを通して協力や責任感を養うとされてきた。

しかし、私は共生を知るといった自他の生命尊重の教育をどの子にも与えたいと考える。ここに小学校において動物を飼育するねらいがあるのではないだろうか。子どもと共に動物を介在にした会話のキャッチボールが展開できる。

教師は、動物飼育に関わる一番の当事者であり、かつ推進すべき立場にある。教師は動物を子どもの育ちに教材として生かすことを考えるべきである。

小学校の教育を考えると、動物の飼育が単に情操教育に役立つといったような抽象的認識ではなく、具体的に教育課程と関連した科学として捉えられていけば、その有効性の追究意識から学校動物飼育に関わる課題解決もできると考える。

(厚木市立愛甲小学校教諭)